



すべてに背を向けていた私は バイブルキャンプで神様に向き直った

嘉手納バプテスト教会(沖縄県)
北中城若松病院 チャブレン助手 **瑞慶山 真**

私は両親ともクリスチャンの家庭に4人兄弟の三男として生まれ、幼い頃から両親の熱心な信仰と教会で一生懸命に奉仕をする姿を見ながら、教会に集い優しく接してくれる方々にも囲まれて成長しました。ですからこの世界に聖書の神様の存在は当たり前で、日曜日に教会に行くのが自然な事と思っていました。

しかし日曜日以外となると、私の周りにいる学校の友達にはみんな教会に行った事がない人ばかりでした。友達と仲良ししているためには、みなと同じでなくちゃいけないと思うようになり、教会に行っていること、神様を信じていることを次第に友達の前では口にしなくなり、それが恥ずかしい事とさえ思うようになっていました。

中学に入り反抗期を迎えた私は、大人の目を隠れ問題を起こすようになっていました。それで親が学校に呼び出された事も何度かありました。そのたびに反省するどころか、格を上げた気になって反抗する態度を強めていました。しばらくたったある日、今度は金銭トラブルを起こしました。この日を境に私は裏切り者、半端者と後ろ指をさされ、友人たちから受け入れてもらえなくなりました。

もう自分の居場所はどこにもないと思った私は、誰にも会いたくない、どこにも行きたくないと家から一歩も外に出ないで、自分の部屋に引きこもるようになっていました。何もかもが嫌になって、こうなったのは何かのせい誰かのせいだとばかり考えるようになっていました。

そして迎えた夏休み、何も状況の変わらない私の事を心配に思った両親は、私を教会の夏季キャンプに誘ってくれました。家を離れ、初対面の人たちとの非日常的な3泊4日の共同生活は、私にとってとても偶然とは思えないタイミングでした。

自然に囲まれての礼拝や聖書の学びの時間、先生や新しい友達と運動で汗をかいたり、海で泳いだり、就寝時間を過ぎて明け方近くまで語り合ったりもしました。住む場所や育った環境はみんな違ったけど、それぞれ課題や悩みを抱えている事を知りました。みんなとの出会いが嬉しくて、一人じゃなかった、ずっと一人じゃなかったと思えるようになっていました。

キャンプの最終日の晩、キャンプファイヤーを囲みながら過ごしました。炎を見つめるみんなの顔が明るくてよく見えました。とても静かな夜で、時々バキッと薪が割れて火の粉が弾けてもすぐに暗い闇に吸い込まれるのを見てると、この場所やこの時間、全体が包み込まれているような感じがしていました。

讚美歌を歌った後、キャンプファイヤーを背にして先生がお話をしてくださいました。聖書に出てくる放蕩息子のたとえ話でした。親元を離れて放蕩の限りを尽くす息子が、私自身の事のように思えて胸がチクチクと痛みました。何もかもうまくいかなくて、独りぼっちで淋しくて、それを誰かや何かのせいにしていた事が間違いだったと気づかされました。放蕩息子が自分の過ちに気が付いて父親の元へ帰る決心をして変わったように、私も変わりたいと思いました。

先生が「目を閉じて自分の心に問いかけてください。イエス様は十字架にかかって死なれました。あの十字架の死は私の罪の身代わりだったと信じてバプテスマを受けたいと決心しますか」と言いました。私は手をあげ立ち上がってイエス様を信じる決心をしました。先生は、「イエス・キリスト様があなたの罪を背負ってください。あの放蕩息子の父親のように、神様が今あなたを迎えようと両手を広げて近づいてくださいます。あなたもあの放蕩息子のように自分の罪を神様の前でごめんなさいと告白するなら、神様はあなたを赦して受け入れてくださいます。一緒に祈りましょう」と言って祈ってくださいました。

教会に行っている事、神様を信じている事を恥ずかしい事だと思うようになっていた私は、自分勝手に好き勝手な事ばかりを繰り返して、それでいて自分に都合の悪い事の責任を自分ではなく周りのせいにしてきました。神様に背を向けてきた事が私の罪でした。私は神様に背を向けていたのに、神様はずっと私を見守っていて、私が神様の方へ向き直るのを待っていてくださったのです。そして私が神様の方へ向き直ったら、もう道を間違えないようにと私のためにイエス様を送ってくださったのです。

キャンプを終えて私はまた教会に通い始めました。教会のみんなは私を温かく迎えてくれて、バプテスマを受ける時にはたくさんの方が一緒に喜んでくれました。



江戸クリスチャン迫害地プレヤーツアー報告 ～大殉教から400周年を記念して～

日本同盟基督教団 子母口キリスト教会 **青木 幹夫**

江戸で12月4日に50人のクリスチャンが火あぶり刑で殉教してから、昨年が400年の節目でした。2年前から、この年にこの殉教の史実を学ぶ機会を作りたいと祈っていました。幸いに5月に自分の所属している教団の宣教区の働きでツアーを実施することが出来、クリスチャン新聞に報道されたのをきっかけに、JTJでもツアーをしようと、TPCの和氣さんやJTJ後援会の所さんとの協力を頂き、11月25日に32名の参加で実施しました。また12月4日には殉教者が歩かされた約10キロの道を、ウォーク・ウイズ・ジーザスの姫井先生などと歩き、50本のろうそくを灯し、殉教者の死を通して、これからも日本の宣教への励ましとなることを祈りました。

「長崎の26人聖人の殉教は知っていたが、江戸の殉教は今回初めて知った」という方もいました。秀吉の禁教令以後、江戸はフランシスコ会の宣教師によって、浅草を中心にクリスチャンが増えていきました。3代将軍家光が就任した年に、密告者により隠れ家を襲撃され、一気に2人の宣教師と旗本の原主水のほか47人がつかまり、小伝馬町の牢屋から、三田の小高い丘まで連れられて行きました。ツアーはこの小伝馬町の牢屋と三田の殉教地のほか、江戸の3大刑場であった小塚原刑場跡(南千住駅近く)と、遠藤周作の沈黙の舞台である、江戸クリスチャン屋敷跡(文京区小日向)と高輪カトリック教会を、地下鉄1日乗車券を使っただけの行程で見学しました。小塚原刑場跡は回向院という寺になっています。刑場での死刑は斬首で、刀の切れ味を試すことがなされ、小伝馬町の牢屋の模型でも、そのジオラマが目には焼き付いた人も多かったと思います。クリスチャン屋敷跡では、2014年にマンション建設現場から人骨3体が見つかり、新井白石が西洋紀文を著すきっかけになった、イタリア人シドッチ神父の骨であることが実証されています。

参加者には60年前に出版された「江戸の切支丹」という、内山善一先生の文章を最近の写真などネット情報を挿入して、カラー版30ページに青木が編集した資料をお渡ししました。



三田殉教地にてキャンドル祈禱(右端が筆者)



三田殉教地で説明する筆者(左)



殉教の絵画 高輪カトリック教会資料室



ニューワイン ～深みに漕ぎ出して網をおろす～

野田 修司(埼玉県)

新しいワインは新しいボトルへ。キングジェームズ訳ではボトル、ニューインターナショナル訳ではワインズキンetc。もちろんイエス様が話されたワインを保管する皮袋のお話して、JTJの理念にもなっていると思います。ボトルというと酒のみの集まりみたいですが、コンセプトとしては新しいぶどう酒であるイエスの教えを注ぐために相応しいエクレスシア[集まり]でありたいと願い、3年前の春に開拓をはじめました。イエス様のこの教えは2024年以上も経った今も革新的で、私たちの皮袋は時代と共に古くなっていきます。

3年前、10年仕えた教会を後にしました。2008年にJTJと姉妹校であったゴスペル音楽院(現ワーシップジャパン宣教師人材育成学院)を卒業し、巡回音楽伝道者として全国の教会や少年院、刑務所などで歌って主を証してきました。2014年、群馬県にあるクリスチャン音楽事務所の「びぶりか企画」より、弦詞人という名義でアルバムをリリース、元々2人組でしたが、ひとりでの活動を余儀なくされ、牧師としての働きの傍らフィールドを教会の外側に移し、居酒屋やバーなどで弾き語りライブ活動を開始しました。小さなお店を全国行脚するような多くのミュージシャンと交流ができ、以前の教会在籍の時、イベントや礼拝にも店のマスターやミュージシャンが来訪してくれました。私たちクリスチャンが外に行かないだけで、その囲いの外には私たちクリスチャンに対する誤解を持っている人や、何かを求めている人がいるのを見て、畑は色づいていると思わずにいられませんでした。「収穫は多いが働き手は少ない」というよりも、リバイバルが起こらないのはあまりに宗教化してしまった教会、つまり皮袋が問題なのではないかと感じました。

3年前(2021年)の開拓のスタートのときは、10年間山積した荷物をまとめ、教会の牧師館を出て、私たちの家族と、私たちについて来てくれた今のメンバーと一緒に、ボウリング場の会議室で礼拝を捧げました。家族

4人で小さなアパートを借りねばならず、本当に多くの物を捨てなければなりません。霊的な束縛が無くなり、自由に賛美礼拝を捧げられるようになり、ギターを弾いて神様への賛美を捧げる時、私の足は子牛のように跳ねまわり、主を喜ぶことの力を味わい、本当にフリーダム(自由)を感じました。閉塞感の中で破られるべき皮袋を、ワインが打ち破り、流れ出る。今はその新しいワインを入れるべき皮袋をこしらえている状況でしょうか。別の言い方をすると、建物では無い真の教会を建設しようとしているところです。主が提示されるブループリント(建設構造)に従って、忠実に建てあげていきたいと願っています。

私たちの教会は、正式な名称もホームページも無ければ、教会員制度も役員会もありません。教会の中でも様々な問題に対峙しつつ、次々と奉仕者、求道者も与えられています。形式やこの世の価値基準に囚われず、主が導かれる小道へ真っ直ぐに進みたいと思います。



ライブハウスにて